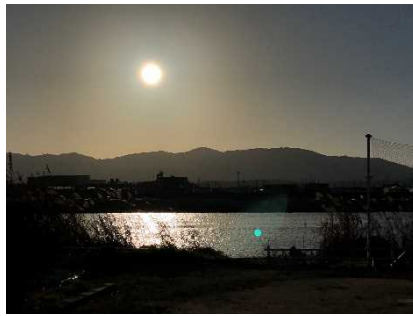


# 月影



第74号

案じている人から  
案じられている



令和四年十月一日発行  
浄土宗西山禅林寺派  
常林院

今は亡きあの人は  
どうしているかと  
案じている私を

今は亡きあの人が  
悲しみの中にいる  
私を案じている

「悲しまないで」と  
聞こえない声で  
見えない姿で

開宗八五〇年

## 法然上人の生涯



【十一】

## 法難のはじまり



## 教団の滅亡

法然上人が六十代の頃、その教えに心を動かされた有力な僧の弟子入りが相次ぎ、少しずつ教団として成立していきました。浄土真宗の開祖である親鸞しんらん聖人しょうにんも、法然上人が六十九歳の頃に弟子入りしています。

## 誰もが救われる教え

自分の力で極楽へ往生

するのではなく、私たちがお念仏を称えることによつて、阿弥陀仏が極楽へ往生させてくださる他力の教えは、公家、武士から庶民まで、広く支持されました。当時、京都の信徒は三万人を超えていたといわれます。

## 批判と弾圧



しかし、法然上人の教えに集う人々の勢力拡大の動きに、既存の教団は警戒を強め、法然上人に対して批判を向けるようになってきました。

厳しい戒律や修行に耐えて、悟りをひらくことを目指している当時の仏

教界からすれば、お念仏を称えれば誰でも救われるとする法然上人の教えは、異端とみなされるものでした。

## 元久の法難

一二〇四年、法然上人への批判の声はいよいよ高まり、比叡山の僧たちが延暦寺で集会を開き、天台座主に対して、「念仏停止」を訴える事件が起きました。これを「元久げんきゅうの法難ほうなん」といいます。

「念仏さえ称えれば、どのような行いをしても許される」と勝手な解釈で理解し、悪事を反省せず、

反社会的なふるまいをする者も現れたことへの抗議もおこりました。

## 七箇条制誡



このような危機的状况を受けて、法然上人はすぐさま門弟を集め、教えを履はき違ちがえた者の行き過ぎを戒める「七箇条制誡」を記し、弟子たち百九十名に署名させ、自身の弁明書を添え、天台座主に提出しました。決して他宗を軽んじている意図はないことを示したことで、九条兼実の弁護もあり、法難は一時的ではありましたが収束に向かいました。

(つづく)

# 仏事と

## 作法

### 葬儀式(五)



### 中陰

葬儀が終わると、中陰の期間に入ります。

中陰とは、古代インドでは人が亡くなると、ある期間を置いて生まれ変わるという考えがありました。この期間を中陰といます。

一般的な中陰の考え方は、お浄土へ往生するのに、初七日で生まれ変わ

る人、それが無理なら二七日、三七日、四七日：と続き、どんな人でも七日（四十九日）経つとお浄土へ生まれるという考え方です。

### ひじを曲げる速さ

しかし、我が宗派では、この世とあの世を迷う期間はなく「南無阿弥陀仏」とお念仏を聞けば、すぐさま阿弥陀仏が迎えに来て下さり、お浄土へ往生するという教えです。

腕を曲げるくらいの速さで阿弥陀仏が迎えに来て下さると経本に記してあります。

### 蓮の花となつて

お浄土へ往くと、浄土の池の蓮の花から生まれるといわれます。しかし、その蓮の花の開く速さが、生前のおこないによって、速い人、遅い人があるといます。だから、一刻も早く蕾が開くようにと、中陰のお勤めをするのです。

また中陰は、残されたご家族の心の整理をする期間でもあります。

中陰法要を通して、故人との思い出をもう一度辿り、その中で、受け継ぐものは受け継ぎ、子に伝えるものは子に伝える。そうやって、故人と向き

合う中で、しだいに心が整理されていく大切な期間です。

### 三月超し



中陰が三月にまたがる時、三月越しといって嫌う傾向があります。

これは、始終苦（四十九）が身につく（三月）

「始終苦しみが身につく」という語呂合わせからきているもので根拠はありません。しかし、気にされるようなら対外的には五七日で忌明けをし、あとは家族だけで四十九日まで勤めるようにします。

# 仏教歳時記



墓<sup>はかい</sup>生きて我<sup>われ</sup>を迎<sup>むか</sup>へぬ久<sup>ひさ</sup>しぶり

高<sup>たか</sup>浜<sup>はま</sup>虚<sup>きよ</sup>子<sup>よし</sup>

「墓」という字は、「莫」と「土」を組み合わせた漢字です。「莫」は暮や冥と似ているように暗いことを意味します。しかし、墓は「慕う」という字にも似ており、「慕う」は「小（子孫）」がお墓参りしている形に見えることもできます。

亡き人がそこに生きて  
いると思う心があるから  
こそ、聞こえない声も聞  
こえるのでしよう。

「よく来たね。久しぶり」と。



## 雑記抄

〜俱会一処〜

気温がぐっと低くなる早朝。草花の上に、きらきらと露がでける日があります。朝日に照らされ輝く光景は幻想的です▽しかし、日が昇り気温が上がる、輝いていた露は、一つずつ蒸発して消えてしまいます。露の寿命は、朝日が昇るまでの、儂いものです▽露の身はここかしこにて消えぬとも、こころはおなじはなの台（うてな）ぞく、浄土宗を開かれた法然上人の御歌です。「私たちも露と同じ儂い命。寿命が来れば一人また一人、露が消えていくように、お

浄土へ往生していくのです。でも、阿弥陀さまに連れられたお浄土で、池に咲く蓮の台（うてな）の上で、皆、再び出逢うのですよ」という御歌です▽「俱会一処」という言葉がお経にあります。「一つの処で俱に会う」といふ意味が込められています▽大切な人との別れは、辛く深い悲しみにおそわれます。でも、この世の別れは一時の別れ、いずれ、お浄土の蓮の上で、再び出逢えるのです▽「また出逢える」その喜びが、この世を生きる、大きな支えとなります。